

スポーツに対する保護者の価値観および属性と役割行動との関連性について —スポーツタレント発掘事業に参加する保護者を対象として—

藤本 晋也¹⁾ 平良 拓也¹⁾ 栗木 一博¹⁾

1) 仙台大学体育学部

研究資料

スポーツに対する保護者の価値観および属性と役割行動との関連性について —スポーツタレント発掘事業に参加する保護者を対象として—

藤本 晋也¹⁾ 平良 拓也¹⁾ 栗木 一博¹⁾

1) 仙台大学体育学部

Fujimoto Shinya¹⁾, Taira Takuya¹⁾, Awaki Kazuhiro¹⁾: The relationship between guardians' values and attributes for sport and their role behavior -For guardians participating in the local prefectural talent identification and development programs of sports. - : Bulletin of Sendai University, 52 (1) : 27-39, September, 2020.

1) Sendai University Faculty of Sports Science

Abstract: The purpose of this study was to determine the relationship between guardians' values and attributes in sport such as their sporting experiences which may influence the formation of these values, and guardians' role behaviors toward their children's sport. The factors of "benefits", "personal growth", "affection", and "winning orientation" were extracted as guardians' values, and the factor of "intervention and support" was extracted as role behaviors. These factors were found to be attributed to guardians' values of their children's sport achievements. High expectations for children's sport achievements were found to be related to acquisition and winning orientation and also strongly related to direct intervention behaviors in sports behavior. It was suggested that the program focusing on the sense of expectation for children's sport achievement in the local prefectural talent identification and development programs delivered for their guardians is important.

KEYWORD expectations for children's sport achievements, Intervention behavior in sports, Program for guardian

キーワード 子供の競技成績に対する期待, スポーツへの介入行動, 保護者向けプログラム

I. 緒言

スポーツ庁は「競技力強化のための今後の支援方針（鈴木プラン）2020年以後を見通した強力で持続可能な支援体制の構築」（スポーツ庁, 2018）の中ですべてのスポーツ関係者に対して2020年の東京オリンピックおよびパラリンピック競技大会において日本選手団が優れた成績を収めることができるように支援を強化するとともに、それらの取り組みが持続可能な支援体制として継承されていくことを示した。さらに2017年4月に公表された「第2期スポーツ基

本計画」においては、国際競技力向上に向けた強力で持続可能な人材育成や環境整備のための施策目標の一つの柱として、「中長期の強化戦略に基づく競技力強化を支援するシステムの確立」を掲げている（スポーツ庁, 2017）。これは、日本において潜在的なメダリストやトップアスリートの競技力強化に対する支援に限らず、トップへの途上にある有望なスポーツタレントの発掘から、その育成・強化体制も含め、中長期的な競技者の競技力強化・支援が重要であることを示している。

中長期的な国際競技力向上の観点からタ

レント発掘・育成 Talent Identification & Development (TID) は、スポーツ政策の重要施策の一つとして位置づけられている (Bosscher et al., 2006). また, Bosscher ら (2009) はいくつかの国家の政策を事例的に分析し, 特にメダル獲得の国際優位性を保つためには, 多くの人材の中からメダル獲得の潜在力を有するスポーツタレントを見出し (Identification), 系統立てられた検証・育成プログラムの中で組織的かつ計画的に育成 (Development) することが必要不可欠であるとしている. スポーツ界におけるタレントとは, 「限られた時間の中で国際競争に耐え得る水準のパフォーマンスを獲得し, それを定められた期日と時間内に最大限に発揮し, 相手との競争において優位性を保持し続け, 最終的に優位に立っている能力」(和久, 2016) と定義されており, 国際競技力向上のための中長期的な施策の一つとしてスポーツタレントの発掘育成事業が位置づけられることの重要性が理解できる.

この施策を受けて, 現在, 日本で小学生および中学生を対象としたスポーツタレント発掘育成事業が実施されている. その実行形態や規模など多岐にわたっており, 詳細な事業数を把握することは困難だが, 日本スポーツ振興センターとの連携の元に事業が実施されている地域は34地域に上ることが報告されている (日本スポーツ振興センター, 2019). ここではスポーツに関する能力の高いアスリートを小学生や中学生の年代で発掘し, そこに競技能力を伸ばす, あるいは適性のある競技種目を見出すためのプログラムを集中的に実施することによって育成を行い, さらに, 有効なパスウェイ (子どもがスポーツに触れてからトップアスリートになるまでの道すじ) を提供することを目的に実施されている. 多くの地域でそれぞれの特色に応じたプログラムが展開されている. 多くの地域では身体的な能力を向上させるためのプログラム, スポーツに対する考え方や態度について学び, 長く続くアスリートとしての生活を支えるためのプログラム, 自分の適性を見極めるためのスポーツ競技種目の体験プログラムなどによって構成されている. さらに, 対象としている年齢

が小学生から中学生ということもあり, その育成には保護者が深く関わることが想定される. そこで, この保護者に対するサポートプログラムがこの中に含まれている地域が多い. 主な内容を調べてみると, 栄養や休養などに関するスポーツ科学情報の提供, 子どもが体験しているプログラムに関する解説, 子どものスポーツに対する保護者の関わりについて考える機会の提供などが主な構成要素となっている. (山形県スポーツタレント発掘事業実行委員会, 2019: 和歌山県教育委員会, 2019: 高知県パスウェイシステム事業, 2019: 公益財団法人埼玉県体育協会, 2019など)

ジュニア世代にあるアスリートが今後世界のトップアスリートとして活躍するまでには長い育成・強化という道のりを歩まなければならない. リオデジャネイロ・オリンピック競技大会に参加したアスリートを対象とした調査においては, 国際大会に初めて出場した年齢が男性では22.2歳 \pm 3.9歳, 女性では20.8歳 \pm 4.1歳で, リオデジャネイロ・オリンピック競技大会に出場したアスリートの平均年齢は, 男性では27.1歳 \pm 5.3歳, 女性では25.0歳 \pm 4.9歳で, 競技年数は男性が15.1年 \pm 5.4年, 女性が14.1年 \pm 5.5年と報告されている (日本オリンピック委員会, 2019). このような長い年月を高い動機づけを維持しつつ, 競技生活を継続するためにはアスリートを取り巻く支援が必要不可欠となる. 特にジュニア世代ではその生活の中心が家庭であることから保護者の支援が必要であり, この質の高さが競技者育成に対して大きな役割を担っている.

このようなスポーツに関与する保護者の行動はスポーツ・ペアレンティングと呼ばれており, 子どものスポーツ場面における保護者の養育態度とその関連場面における親の子どもへの関わり行動と定義づけられている (Holt, Tamminen & Black et al., 2009). Fredericks and Eccles (2004) は子どもの動機づけに親が与える影響についてまとめており, 親の年収や職業, 子どもの特徴 (兄弟の有無や性格など), 家族の信念や関係, 両親と子どもの価値観, 両親のモデルとしての役割などが子どもの目標設

定や活動に影響をおよぼしているとしている。ただ、上記の研究で取り扱われている一般的な事象に対する価値観ではなく、スポーツに直接関連づけられた価値観とそこから生じると考えられる行動との関連性を明らかにすることはスポーツを通じた教育を行うためには大きな意義を持つものと考ええる。

本研究においては保護者のスポーツに対する価値観およびその価値観の形成に影響を及ぼしているであろうと考えられるスポーツ経験などといった保護者の属性と保護者の子どものスポーツに対する役割行動との関連性を明らかにすることを目的としている。対象はスポーツタレント発掘育成事業に子どもが参加している保護者であることからスポーツに対して肯定的な価値を見いだしていることが考えられる。それと同時にこの価値観を形成したのは保護者自身のスポーツ経験によるところが大きいのではないかと予測される。しかし、石原（2010）は親の勝利・競技志向性と子どもへの過度な期待との関連性についてサッカーの大会場面を取り上げて調査を行っており、サッカーの大会（結果）に対する不満を表明した保護者は子どもが行う競技に対する状態不安が高く、子どもに対するイメージも否定的なものであったと報告している。また、親の期待が高いにもかかわらず、子どもの行動がそれに伴わないことによって子どものイメージが悪化し、ストレスが昂じて不適切な厳しすぎる行動を引き起こすといった報告もある。これらの報告は先述した、トップアスリートを目指すために必要とされる長期間のスポーツに対する高い動機づけの維持を阻害し、保護者の役割として期待される支援行動の停滞を招きかねない。

日本オリンピック委員会はアントラージュ（競技者を取り巻く人的環境：「取り巻き」という意味のフランス語）の活動指針を提示しており、保護者に対するプログラムが明確な形で位置づけられている（日本オリンピック委員会，2016）。そこには保護者が自分の哲学を持ち、スポーツの価値を認め、競技者の成長を導く行動を選択することが示されている。ジュニア世代に関わる保護者がどのような価値観を有

し、自らの役割をどのように捉えて行動しているかを明らかにし、行動に関する指針を有しているかを明らかにすることによって、これらのプログラムをさらに発展させていくための資料を得ることは意義深いことだと考える。

Ⅱ．研究方法

1. 調査対象

タレント発掘事業が実施されている2地域において発掘された小学生、中学生の保護者136名（地域や調査対象の属性については表1に示す）であった。この内、回答に不備のあるデータを除いた127名を分析の対象とした。

表1 調査対象者の内訳（人）

	全体	男性	女性
地域A（関東地方）	72	19	53
地域B（四国地方）	55	20	35
合計	127	39	88

2. 調査時期

2019年8月から10月にかけて育成プログラムが実施されている地域（地域は関東、四国地方の2地域）に調査用紙を持参し、その場で回答、回収を行った。

3. 調査内容

1) 調査対象の属性

調査対象の属性を調査するためにフェイスシートにおいて性別、年齢、子どもの性別および年齢、子どもの専門とする競技種目と経験年数、さらに、子どもの競技成績に対する期待を「国際大会での優勝」から「期待はしていない」までの5段階で調査した。また、親の競技経験について競技種目と経験年数、最高成績について質問をした。

2) スポーツに関する価値観調査

次に「価値観に関する調査」として亀田・吉川（2006）によって作成された「競技価値観尺度」（52項目）を使用した。結果の欄に改めて詳述するがこの質問項目への回答に対

する因子分析を行い、スポーツの価値に対する認知構造を明らかにしようとした。

質問文に対して5件法（よくあてはまる・ややあてはまる・どちらともいえない・あまりあてはまらない・まったくあてはまらない）を用いて回答を得た。

3) スポーツに関する保護者の行動意識調査

子どものスポーツ活動において保護者が果たすべき役割に関する調査を行った。タレント発掘活動に携わる研究者3名が想定される保護者の活動を列挙し、45項目の質問を作成した。質問文は「以下に示す項目についてあなたが、保護者が果たすべき役割としてどの程度重要だと考えているかお答えください」として回答を求めた。質問にはすべて5件法（よくあてはまる・ややあてはまる・どちらともいえない・あまりあてはまらない・まったくあてはまらない）を用いて回答を得た。

上記内容の調査を実施するために、事前に仙台大学研究倫理審査会の審査を経ている（倫理審査委員会通知30-2）。また、実施に対して事業の実施母体との話し合いを行い、その許可を得た。さらに、実施に当たっては、調査への回答が任意であり、未提出によって何ら不利益を被ることがないことを説明した上で、調査用紙の提出を回答への同意とすることを説明した。さらに、同意に関する確認のために調査用紙内に同意確認のためのチェックマークを記入するように求めた。配布した調査用紙のはじめに書かれているデータの取り扱いや個人情報秘匿に関する記述を熟読するように求め、口頭によっても説明を行った。

4. 分析手順

調査対象者の属性に関しては基本的な統計量を求めたうえで、度数の分布を調べた。また、親が子どものスポーツの競技成績にどの程度期待しているかについての質問も行った。選択肢は、「国際大会での優勝」、「国際大会での入賞」、「国際大会への出場」、「全国大会での優勝」、「特に期待をしていない」であった。この質問につ

いても度数の分布を調べた。

スポーツに関する価値観調査52項目の回答結果に対して、主因子法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。因子の解釈には因子負荷量が0.4以上を示すものを対象とした。因子数の決定は固有値、累積寄与率、スクリーテストを用いた因子の解釈可能性を考慮して因子を抽出した。また、因子の内的整合性を検討するためにクロンバックの α 係数を用いた。抽出された因子を構成する質問項目の得点の平均値を算出し、それを価値観に関する因子得点とした。

また、スポーツに関する保護者の行動意識調査45項目の回答結果に対して、主因子法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。因子の解釈には因子負荷量が0.4以上を示すものを対象とした。因子数の決定は固有値、累積寄与率、スクリーテストを用いた因子の解釈可能性を考慮して因子を抽出した。因子の内的整合性を検討するためにクロンバック α 係数を用いた。さらに、抽出された因子を構成する質問項目の得点の平均値を算出し、それを保護者行動に関する因子得点とした。

保護者の特性や考え方とその行動との関連性を調査するために、保護者の属性と価値観を説明変数、行動を目的変数とした共分散構造分析を実施した。

基礎的な統計量の算出および因子分析にはSPSS ver.25を、共分散構造分析にはExcel SEM（小島、山本、2013）を使用した。

Ⅲ. 結果および考察

本稿では分析に際して探索的因子分析と共分散構造分析が用いられている。これらの手法から結論が導き出されるためには正確な解釈が必要となる。そこで、解釈をより妥当なものとするために先行研究を繙きつつ、さらに、裏付けを得るための分析を行いながら論を進めることになる。そのため、結果と考察を併存させることにした。

1. 調査対象者の属性

1) 年齢

保護者の年齢は平均41.2歳 \pm 4.5歳であった。また、子どもの年齢は平均が10.3 \pm 0.8歳であった。

2) 専門とする種目と経験年数および競技実績

保護者が専門的に経験したスポーツは陸上競技19名、バスケットボール14名、ソフトボール11名、テニス10名（硬式と軟式を含む）、バレーボール9名、サッカー9名、水泳7名、ハンドボール5名、野球4名、柔道3名、剣道2名、卓球3名であった。その他1名の競技種目にはバドミントン、スキー、カヌー、アメリカンフットボール、ボディーボード、太極拳、弓道、空手、器械体操があった。また、専門的に取り組んだ経験がないという回答者が25名（19.7%）あった。合計が127名を超えるのは複数種目を記入している事例による。

保護者の競技経験年数は平均で6.7年 \pm 7.5年であった。競技実績では全国大会での入賞者が6名、全国大会への出場が14名、地域の大会での入賞が50名、入賞した経験がないは32名であった。

子どもの専門とする種目は陸上競技が32名で最も多く、サッカー16名、水泳8名、バドミントン、空手、野球、バスケットボール、テニスがそれぞれ4名、器械体操3名、ドッジボール、ハンドボール、フェンシング、ボルダリング、柔道、太極拳、野球がそれぞれ2名、その他1名の記述があった競技種目はカヌー、スピードスケート、ソフトボール、トランポリン、バレーボール、ラグビー、剣道、卓球、ダンス競技であった。合計が127名を超えるのは複数種目を記入している事例による。

子どもの競技経験年数は平均3.3年 \pm 1.8年であった。

3) 子どものスポーツの成績に対する期待

子どもの競技成績に対する期待についての集計結果は、「国際大会での優勝」は13名（10.2%）、「国際大会での入賞」は6名（4.7%）、「国際大会への出場」が21名（16.5%）、「全国

大会での優勝」が38名（29.9%）、「特に期待をしていない」という選択肢を選んだのは42名（33.1%）と最も多かった。無回答は7名（5.5%）であった。

2. スポーツに関する価値観調査の因子分析について

スポーツに関する価値観調査52項目の回答結果に対して、主因子法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。因子数の決定は固有値、累積寄与率、因子の解釈可能性を考慮して4因子を抽出した。因子負荷量0.4未満および複数因子に高い負荷量を示す項目を削除し、因子分析を繰り返し、最終的に39項目で構成される4因子を抽出した。それぞれのクロンバックの α 係数は0.89, 0.85, 0.75, 0.69となり内的整合性は高いものと判断した。第4因子の係数は若干低いが因子を構成している質問項目数が少ないことに起因しているものと考えられる。因子分析の結果を表2に示す。

表2 保護者の競技価値観の因子分析結果－回転後の因子負荷行列－

		F1利得	F2成長	F3愛好	F4勝利志向
Q125	美意識を刺激される	0.729			
Q128	生命の根源を感じることができる	0.703			
Q135	生命の大切さや尊さを実感できる	0.699			
Q148	大自然と一体感を感じることができる	0.685			
Q104	質の高い睡眠が得られる	0.681			
Q124	体の動きを美しく表現する力が身につく	0.651			
Q145	真理の追究である	0.644			
Q113	伝統があり奥深い	0.616			
Q117	動きや型などの芸術性が高い	0.560			
Q130	健康な生活を送るための知恵が身につく	0.555			
Q112	生きがいである	0.536			
Q147	心や体の緊張をほぐす	0.533			
Q152	基礎体力が高まり生活にゆとりができる	0.525			
Q140	健康体でいるためには欠かせない	0.514			
Q107	一生続けるか続けられなくても関与したい	0.510			
Q143	幸福感を得られる	0.503			
Q119	チームワークの大切さが学べる		0.739		
Q121	仲間意識が高まる		0.726		
Q109	我慢強さ・忍耐力が高まる		0.722		
Q115	人間的な触れ合いが感じられる		0.700		
Q118	思いやりの心が生まれる		0.671		
Q120	苦しみや辛さを超えて得られるものがある		0.658		
Q116	追い求めることのできる何かが存在する		0.620		
Q111	自己鍛錬（じこたんれん）の場である		0.592		
Q108	責任感が生まれる		0.588		
Q101	心技体の充実や成長につながる		0.579		
Q127	コミュニケーション能力が高まる		0.506		
Q102	健康や体力の保持増進に役立つ		0.477		
Q123	社会的な考え方が身につく		0.459		
Q131	とにかく好きである			0.814	
Q134	楽しくて仕方がない			0.772	
Q151	行うことも見ることも好きである			0.735	
Q150	没頭できる場である			0.487	
Q141	純粋に楽しむためにやっている			0.418	
Q136	他人とは違うという優越感を得られる				0.712
Q149	勝つことによってのみ楽しさを味わえる				0.692
Q106	自己の名声が高まる				0.635
Q103	2位も最下位も同じで優勝しなければ意味がない				0.633
Q126	自己の能力を周囲に認めもらえる				0.511
	合計	7	6.17	3.93	3.01
	分散の %	17.95	15.81	10.07	7.73
	累積 %	17.95	33.76	43.83	51.56

第一因子は「心や体の緊張をほぐす」「基礎体力が高まり生活にゆとりができる」「健康体でいるためには欠かせない」などの項目によって構成されている因子であり、スポーツから享受する利益に関する項目であることから「利得」因子と命名した。

第二因子は「チームワークの大切さが学べる」「仲間意識が高まる」「我慢強さ・忍耐力が高まる」などスポーツを通じて得られる人間的な成長に関する項目によって構成されており、「人間的成長」因子と命名した。

第三因子は「とにかく好きである」「楽しくて仕方がない」「行うことも見ることも好きである」などスポーツに対する愛好、愛着に関する項目から構成されており、「愛着」因子と命名した。

第四因子は「他人とは違うという優越感を得られる」「勝つことによってのみ楽しさを味わえる」「自己の名声が高まる」などスポーツの競争的側面の特に勝利や成功に関する項目によって構成されていることから「勝利志向」因子と命名した。

本質問項目の出典となっている亀田・吉川(2006:前掲)では専門的な競技経験を有する学生および社会人を対象に調査しており、因子分析の結果「社会性」(「仲間意識が高まる」など)「愛着」(「楽しくて仕方がない」など)「修練」(「我慢強さ忍耐力が高まる」など)「承認」(「自分の名声が高まる」など)「美的」(「美意識を刺激される」など)「健康」(「健康や体力の保持増進に役立つ」など)の6因子を抽出している。本研究においてはこの因子の内、「愛着」および「承認」(本研究では「勝利志向」因子と命名)はほぼ質問項目が同じであった。このほかの因子について質問項目を比較してみると、亀田論文の「美的」「健康」因子の質問項目が混在した形で「利得」因子が、「社会性」および「修練」因子の質問項目が混在して「人間的成長」因子が抽出された形となっている。これは、亀田論文の調査対象者が自己の競技経験に基づくスポーツに対する価値判断をしているのに対し、本調査ではスポーツの実施対象者が自分の子どもであることから、スポーツが子どもに対

してどのような恩恵をもたらしてくれるのかという視点からスポーツの価値を捉えていることが考えられる。その結果、この因子構造、つまり保護者のスポーツの価値に対する認知構造が見られたと考えることができる。

3. スポーツに関する保護者の役割行動意識調査

保護者が子どものスポーツに関してとる行動をどの程度重要であると認識しているかという質問45項目の回答結果に対して、主因子法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。因子数の決定は固有値、累積寄与率、因子の解釈可能性を考慮して2因子を抽出した。因子負荷量0.4未満および複数因子に高い負荷量を示す項目を削除し、因子分析を繰り返し、最終的に27項目で構成される2因子を抽出した。それぞれのクロンバックの α 係数は0.83, 0.75となり内的整合性は高いものと判断した。因子分析の結果を表3に示す。

表3 保護者の役割行動認識の因子分析結果－回転後の因子負荷行列－

		F1 介入	F2 支援
Q235	クラブの練習に付き添う	0.763	
Q242	クラブの練習以外の自主練習につきあう	0.718	
Q240	指導者に練習方法について質問する	0.705	
Q241	一緒にスポーツの目標について話し合う	0.673	
Q238	活動種目の指導方法を勉強する	0.654	
Q239	スポーツ用具の手入れや修繕をする	0.629	
Q245	指導者に試合内容について質問をする	0.609	
Q208	子どもの指導者とコミュニケーションを持つ	0.608	
Q228	クラブの練習の補助をする	0.575	
Q209	クラブの練習を見学する	0.567	
Q220	活動種目のルールを勉強する	0.554	
Q244	大会や試合に付き添う	0.553	
Q243	自主練習をするように促す	0.510	
Q227	スポーツのことについて話をする	0.495	
Q234	子どもの前で審判の判定に対して意見を述べる	0.446	
Q204	子どものプレーをほめる	0.434	
Q206	子どものスポーツに口出しをしない	-0.431	
Q231	栄養のバランスを考えて食事を作る		0.718
Q232	スポーツ用品を購入する		0.685
Q218	たくさん食べられるように工夫をする		0.658
Q236	指導者に敬意を払う		0.599
Q207	大会参加費や合宿費を支払う		0.555
Q233	会費（部費・月謝）を支払う		0.548
Q225	試合で自分の子ども以外の子どもの応援をする		0.541
Q203	ユニフォームや練習着の洗濯をする		0.505
Q229	スポーツ用具を購入する		0.497
Q205	試合でのコンディション調整に気を配る		0.415
	合計	6.570	4.520
	分散の %	19.900	13.690
	累積 %	19.900	33.590

第一因子は「一緒にスポーツの目標について話し合う」「クラブの練習の補助をする」「自主練習をするように促す」などの質問項目によって構成されている因子で、保護者の子どものスポーツに対する介入を表していることから「介入」因子と命名した。

第二因子は「栄養のバランスを考えて食事を作る」「スポーツ用品を購入する」「大会参加費や合宿費を支払う」などの質問項目によって構成されている因子で子どもがスポーツを行うために保護者が行う支援行動を表していることから「支援」因子と命名した。

4. 観測変数間の関連性に関する分析

観測変数間の関連性に関する分析を行った。パス解析を用いた分析の枠組みを概念図として図1に示した。本研究において観測された変数は3つのグループを構成している。説明変数の一つは「保護者の属性」（図中左端の項目群）である。これは図中にも示されているとおり、保護者のスポーツ歴および子どもの競技成績に対する期待から構成されている。もう一つの説明変数は「保護者のスポーツに対する価値観」（図中中央の項目群）である。これは因子分析によって得られた保護者のスポーツに対する価値観を構成している4因子である。目的変数は

「スポーツに関する役割行動」（図中右端の項目群）である。これらは因子分析によって得られた保護者のスポーツにおける役割行動を示す2因子である。

図中矢印で示されているのは、以下パス解析によって明らかにしようとしている変数間の関連性である。図中に示されている矢印aは本研究の目的であるスポーツに対する価値観と役割行動との関連性を示している。所属しているスポーツ教室によって保護者の子どものスポーツに対する期待感（ここでは子どもに身につけてほしいと考える性格や能力を指す）との間に関連性があることを明らかにした金子（2007）の研究から保護者のスポーツに対する価値がそのスポーツに関する行動を規定している可能性があると考えられる。矢印bは価値観の形成に影響をおよぼすことが考えられる保護者の属性との関連性を示している。備前（2018）は、親の

スポーツに対する志向（レクリエーション志向または勝利志向）と子どものスポーツに対する保護者のスポーツ経験および期待との間の関連性を調査している。保護者のスポーツ経験は、スポーツに対する志向とは関連性がなかったものの、勝利志向が強い保護者は「一流の選手になってほしい」という期待が高いことを明らかにしている。本研究では、この研究において取り上げられた「志向」（考え方）に対してその因子構造に対する分析を加え、詳細な分析を試みた。矢印cは保護者の属性とその役割行動との関連性を示している。前掲の金子（2007）によると、専門的な競技能力を高めることに期待を寄せる保護者の割合は、レベルの高いスポーツ教室に子どもを通わせている保護者に多いことが明らかにされている。これは、保護者のスポーツの成績に対する期待とその役割行動との関連性を示唆している。

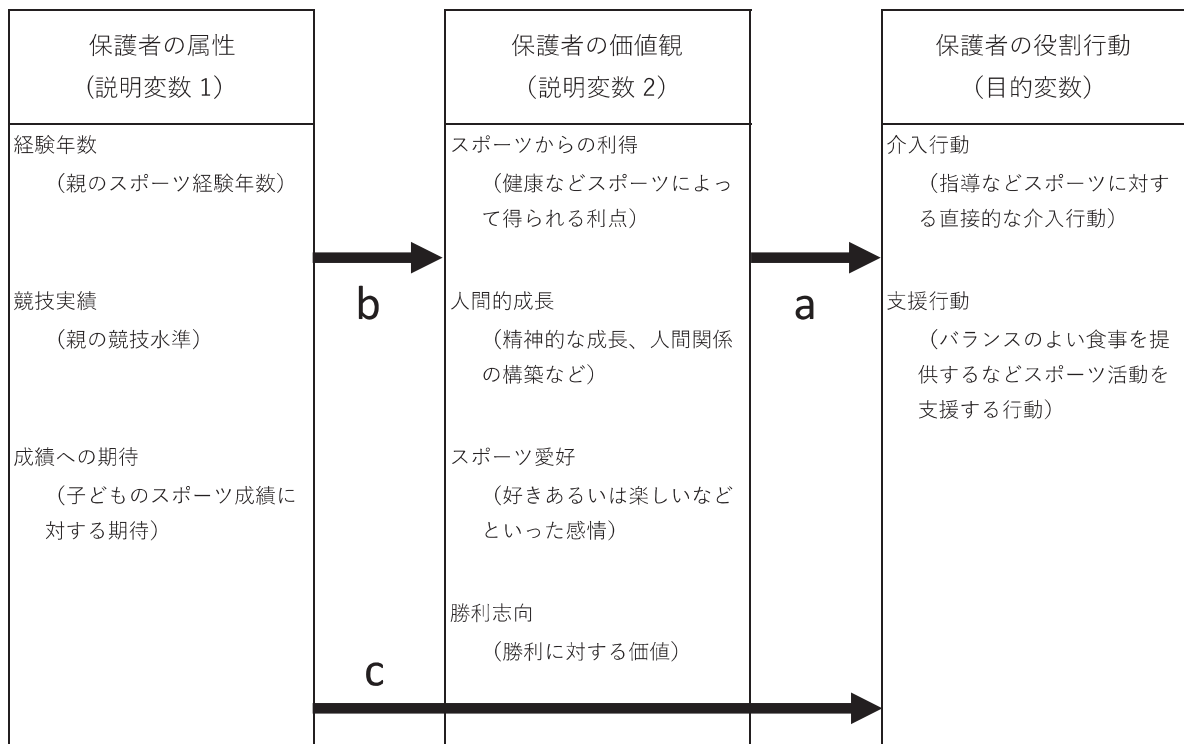
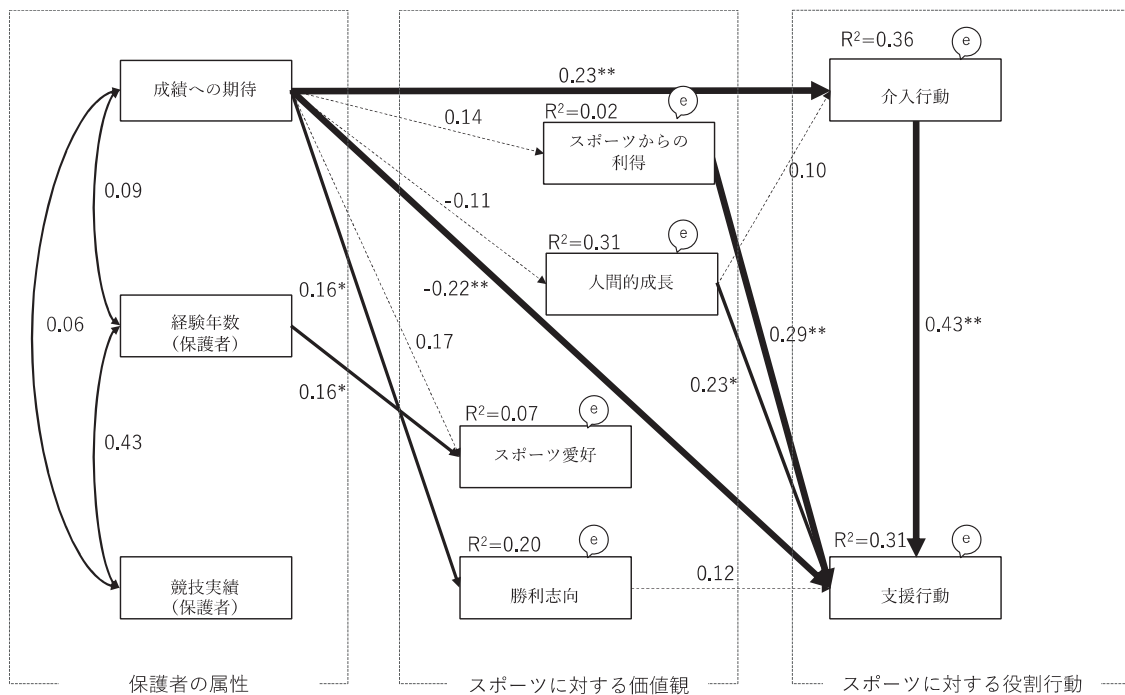


図1 観測変数間の関連性に関する分析の概念図

それぞれのパス（変数間の相互関係や因果関係を矢印で表したもの）の標準化係数とp値を確認し、有意差のあるパス（ $p < .10$ ）を残しながら収束するまで分析を繰り返した。調査対象者の属性として「子どもの競技に対する期待レベル」「自分自身の競技実績」「自分自身の競技経験年数」、スポーツの価値観としてスポーツに対する価値観に関する調査によって得られた

4因子の因子得点の7つの観測変数を説明変数とし、スポーツに関する保護者の行動意識調査によって得られた2因子の因子得点を目的変数として共分散構造分析を行った。最終的に導かれたモデルを図2に示す。推定法は、最尤推定法を用いて解を求めた。主な適合度指標より、モデルは受容できると判断した。なお、適合度の指標は図中に示した。



適合度					
χ^2	10.6	GFI	0.98	NFI	0.967
df	15	AGFI	0.95	CFI	1.000
p	0.781	SRMR	0.04	AIC	19.400
		RMSEA	0.00		

- (1) パス上の数値は標準化係数（** $p < .01$; * $p < .05$; $p < .10$ ）
- (2) 太い実線は1%水準で有意なパス，細い実線は5%水準で有意なパス，破線は10%水準で有意なパスを示している。
- (3) 図中に記載されている「e」は誤差を示している。

図2 因果モデル図

1) 「保護者のスポーツに対する価値観」と「保護者の役割行動」との関連性について

図2に示されている通り、スポーツに対する価値観の「スポーツからの利得」および「人間的成長」因子と経済的な負担や食事などのコンディショニングへの配慮などといった支援的な態度とが強く結びついていることがわかる。これらの因子を構成する項目は、スポーツから享受する恩恵と捉えることができ、これを得るために積極的に支援行動が形成されたものと解釈できる。金子ら（2007）は、プロ選手が指導するクラブに子どもを通わせている保護者と一般的な教育機関の課外活動に子どもを参加させている保護者との子どものスポーツに対する期待感を比較している。その結果、プロ選手の教室ではプロ選手になってほしい、サッカーの技術を身に付けてほしい、と考えている保護者が高い割合を示すのに対し、一般的な課外活動では友人を作ってほしいなどと期待する保護者が多かったという報告がなされている。この研究において変数間の因果関係の方向性については論じられていないが、保護者のクラブの選択という行動と価値観との関連性において本研究において見いだされた結果と方向性の一致を見ることができるものと推察される。

2) 「保護者の属性」と「保護者のスポーツに対する価値観」との関連性について

ここでは「保護者のスポーツ経験年数」と「スポーツ愛好」因子間、「競技成績への期待」と「勝利志向」因子間において正の偏相関係数が見られた。スポーツの経験年数が長い保護者はスポーツ活動を愛好していることが明らかにされた。さらに、子どもの競技成績への期待が高い保護者は勝利志向性が高いという結果が得られた。備前（2018）は保護者のスポーツに対する考え方として、勝利志向的な考え方を持つ保護者は、子どもの活動に対して一流選手になってほしいとの期待を抱くのに対し、レクリエーショナルな志向性を持つ保護者は楽しんでほしいという期待を抱くことを報告している。本研究の対象となって

いる保護者は、子どもをトップアスリートにする取り組みに参加しており、強い勝利志向性を持っていることが想像される。この背景となっているのが成績への期待が明確であるかどうかであることが示唆された。

3) 「保護者の属性」と「保護者の役割行動」との関連性について

パス図は子どもに対する保護者の属性の中の「競技成績への期待」がその役割行動に対する認識に強い影響を及ぼしていることを示している。保護者の高い期待（ここでは世界大会での優勝など）が介入行動に強く結びついていることが正の偏相関係数から明らかになった。また、あまり高くない期待（特に期待はしていないという回答）は、支援的な行動と強く結びついていることが負の偏相関係数を示していることから明らかになった。つまり、期待の高い保護者は具体的には練習への積極的な関与や指導者との関係の構築、目標設定や評価行動への関与などといったスポーツ活動への直接的な働きかけが重要であると認識していることがわかる。これに対して、期待が高くないあるいは特に期待をしていないと回答した保護者は支援的な行動を重要視していることがわかる。ただし、介入行動は支援行動とも強く関連しており、介入行動を積極的に行う保護者は支援行動も重要であると認識していることがわかる。この結果から保護者の役割行動に対して有効な働きかけを実現するプログラムを構築するためには「子どもの競技成績への期待」に影響を及ぼす内容が効果的であることが推察される。

それでは、この期待に影響を及ぼしている要因は何かを本研究の調査内容からわかる範囲で分析を加えてみる。まず、保護者のスポーツ経験との関連性であるが、経験年数と期待との関連および保護者の競技実績との関連はいずれも高くないという結果が得られた（経験年数×期待： $\chi^2=0.86$, $df=8$, n.s., 競技実績×期待： $\chi^2=0.89$, $df=20$, n.s.）。さらに、子どもと保護者の専門としている競技が一致している場合とそうではない場合の期待の高

さについて同様に統計的な検定を行ってみたところ ($\chi^2=0.81$, $df=4$, n.s.) という結果であった。したがって、保護者の期待感は他の要因によって構成されており、本研究によって得られた情報からはこれを明らかにすることはできなかった。

IV. 結論

スポーツに対する保護者の属性や価値観とその役割行動とがどのように関連しているかを明らかにすることを目的として調査研究を実施した。保護者の価値観として利得、人間的成長、愛着、勝利志向という因子が抽出され、役割行動では介入および支援という因子が抽出された。これらの因子は保護者の子どもの競技成績に対する価値観によって規定されていることが明らかになった。期待の高さは利得や勝利志向と結びついており、さらに、スポーツ行動への直接的な介入行動とも強く関連していることがわかった。これに対して、低い期待、特別期待をしていないという回答は人間的成長と関連しており、役割行動においては支援的な行動と強い関連性があることがわかった。ただし、期待感を構成する要因については本研究では明らかにすることはできなかった。

今後、各地域で行われている保護者に対するプログラムにおいてアントラージュとしての自覚を持つことをはじめとして、子どもに対する期待感に対して、その役割行動への機序を説明するとともにそれに働きかけるプログラムが重要であることが示唆された。

文献

- 備前嘉文 (2018) 親のスポーツ観と子どものスポーツ活動に対する期待との関係について, 國學院大學人間開発学研究, 第9号, 1-10.
- De Bosscher, V., De Knop, P., van Bottenburg, M., Shibli, S. (2006). A conceptual framework for analysing sports policy factors Leading to international sporting success. *European Sport Management Quarterly*, 6(2), 185-215.
- De Bosscher, V., De Knop, P., VanBottenburg, M. Simon Shibuli and Jerry Bingham (2009) Explaining international sporting success : An international comparison of elite sport system and policies in six countries. *Sport Management Review* 12, 113-136.
- Fredricks, J. A. and Eccles, J. S. (2004) Parental influences on youth involvement in sport. In M. R. Weiss (Ed.) *Developmental sport and exercise psychology : A lifespan perspective*. 145-146.
- Holt, N. L., Tamminen, K. A., Black, D. E., Mandigo, J. L. and Fox, K. R. (2009) Youth sport parenting styles and practice, *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 31(1), 37-59
- 石原孝尚 (2010) 子どものスポーツ活動を応援する母親のメンタルヘルスの変化－少年サッカー大会前後の比較調査－, 吉備国際大学研究紀要社会学部, 20, 45 - 49.
- 金子勝司, 東野充成, 村田敦郎 (2008) スポーツと子どもの発達に関する研究—子ども向け地域スポーツに対する親の期待感と効用感—, 共栄学園短期大学研究紀要, 第24号, 91-108.
- 高知県パスウェイシステム事業ホームページ (2019) <http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/141801/2017042600066.html>
- 亀田里奈, 吉川政夫 (2006) スポーツの価値観に関する心理学的研究—スポーツ競技者の競技価値観尺度の作成—, 東海大学紀要, 第36巻, 111-119
- 小島隆矢, 山本将史 (2013) Excelで学ぶ共分散構造分析とグラフィカルモデリング, オーム社
- 日本オリンピック委員会 (2019) 競技を始めた年齢と世界大会に出場した年齢並びに競技成績, トップアスリート育成・強化支援のための追跡調査報告書<第二報>, 11 - 14.
- 日本オリンピック委員会 (2016) アントラージュの行動についてのガイドライン <https://www.joc.or.jp/about/entourage/pdf>
- 日本スポーツ振興センター (2016) ワールドクラス・パスウェイ・ネットワーク 地域で実施されているタレント発掘・育成事業. <https://pathway.jpnsport.go.jp/wpn/index.html>
- 埼玉県体育協会彩の国プラチナキッズホームページ (2019) <http://www.saitama-sports.or.jp/platinumkids/>
- スポーツ庁 (2018) 競技力強化のための今後の支援方針 (鈴木プラン) -2020 年以後を見通した強力で持続可能な支援体制の構築 http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop07/list/

価値観および属性と役割行動との関連性

detail/1377938.htm.
スポーツ庁 (2017) 第二期スポーツ基本計画 http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/detail/__icsFiles/afieldfile/2017/04/14/jsa_kihon02_slide.pdf (2017)
和歌山県教育委員会スポーツ課和歌山県ゴールデンキッズ発掘プロジェクトホームページ (2019)
<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/500400/gksp/ikusei/290603/d00154608.html>

和久貴洋 (2016) スポーツの才能を育てる教育と組織. 子どもと発育発達, 13(4): 232-238.
山形県スポーツタレント発掘事業実行委員会ホームページ (2019) <http://www.y-dreamkids.jp>

(2020年 5月28日受付)
(2020年 8月28日受理)